

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月6日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02127

研究課題名(和文)日本の商環境デザインにおける美術の影響とその意義に関する研究

研究課題名(英文)Influence of Art on Commercial Interior Design in Japan

研究代表者

橋本 啓子 (HASHIMOTO, Keiko)

近畿大学・建築学部・准教授

研究者番号：20610570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1960～70年代の商業インテリアにおける美術の影響を、美術家の山口勝弘と伊藤隆道、デザイナーの境沢孝の商業インテリアの作例を中心に分析し、そのデザイン学上の意義を考察した。研究の結果、各作家が各々異なる方法で美術と商業インテリアとの融合を試みたことが明らかになった。山口勝弘はオブジェが周りの空間を支配していくインテリア・デザインを、伊藤隆道はモビール彫刻から美術の要素をはぎ取り、空間デザイン(環境)に変換することを試みた。境沢孝はクリストの美術からアンチデザイン、虚構風景としてのインテリアを編み出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の商業インテリアは他の国にはない実験性にあふれているが、これまでそれに焦点を当てた研究はなかった。今回の研究では、その実験性のルーツである美術とインテリア・デザインとの相互交流のはじまりを、山口勝弘、伊藤隆道、境沢孝の作例を中心に明らかにした。成果については国際学会と電子ジャーナルを通じておもに英語で発信し、これまで倉俣史朗以外は知られていなかった日本の商業デザインの独特な変遷を内外に伝えることができた。また、研究者の著述はインテリア・デザインの学術的研究方法を伝えることに貢献したとの評価も頂いた。

研究成果の概要(英文)：This research is intended as an investigation of the influence of art on the commercial interior design of the 1960s and 1970s. The research is particularly concerned with the interior design works by Katsuhiro Yamaguchi, Takamichi Ito and Takashi Sakaizawa, each of whom had their own unique methods related to the fusion of art and interior design. Yamaguchi insisted that designing an interior should start with objects and then move on to space, rather than the other way around. Ito was inspired by mobile sculpture and transferred this to space design. Sakaizawa seemed to extrapolate the concept of Cristo's packaging art and apply it his interior designs.

研究分野：デザイン史 芸術学

キーワード：美術とデザイン インテリアデザイン 境沢孝 伊藤隆道 山口勝弘 倉俣史朗 商環境デザイン デザイン史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 1960～1970年代の美術とインテリア・デザインの交流に関する注目の高まり

本研究開始当初は、本研究が目的とする1960～1970年代の美術とインテリア・デザインの交流に関する注目が高まり始めた時期であった。2015年に刊行された鈴木紀慶『インテリアデザインが生まれたとき 六〇年代のアートとデザインの衝突のなかで』(鹿島出版会、2015)は1960～1980年代の美術とインテリア・デザインの交流に初めて焦点を当てた単行書である。デザインジャーナリストである鈴木は1980年代以降のデザインの現場を直に体験してきており、その経験を踏まえて、2012年には内田繁(監修)『日本インテリアデザイン史』(オーム社、2012)を編集している。また、2014年のICSカレッジオブアーツ校友会編『インテリアデザインの半世紀』(六耀社、2014)も本研究テーマへの関心の高まりを示している。

(2) 特定のデザイナーへの注目の偏り

このように、本研究開始の2015年の時点で商環境のインテリア・デザイン、およびその美術との交流に対する関心が高まってきていたとはいえ、注目はつねに倉俣史朗にあり、それ以外のインテリア・デザイナーについては検証されない状況があった。この偏りに関しては、本研究の研究者が2007～2014年に倉俣についての研究を学術雑誌論文や博士論文、展覧会図録エッセイなどのかたちで発表してきたことと無関係ではない。したがって、他のデザイナーや建築家の手になる商業インテリアの研究をする必要があり、本研究はこの観点から構想された。

2. 研究の目的

(1) 1960年代は、多くのデザイナーが美術の動向に刺激を受け、彼らの手がけたデザインが日本の前衛的な商業インテリア・デザインの方向性を決定したとされる。本研究の目的は、この商業インテリア(商環境デザイン)における美術の影響を、1960～70年代の美術家やデザイナーらの作例をもとに分析し、そのデザイン学上の意義を考察することである。

(2) 美術家が空間構成にかかわったインテリア

商業インテリアと美術の相互交流はまず、山口勝弘(1928～2018)や伊藤隆道(1939～)等の美術家が1960年代前半に商業インテリア・デザインの仕事にかかわることで始まったと言って良い。山口も伊藤も商環境デザインを手がけるだけでなく、デザイナーたちとの交流を通じて、商業インテリアの思想構築に貢献した。本研究の最初の大きな目的はまずこのふたりの美術家の商業インテリアとの関わりとそのデザイン学上の意義を検証することである。

(3) インテリア・デザイナーあるいは建築家が手がけたインテリア

美術家の商業インテリアへの関わり、そしてハプニングやコンセプチュアルアート、インスタレーション等の現代美術の日常への接近や空間化を受けて、1960年代には建築家の境沢孝(1919～2001)が、1970年代以降は内田繁(1943～2016)や杉本貴志(1945～2018)等のデザイナーによるインテリアと美術の融合が試みられる。ゆえに本研究の2番目の大きな目的は、これらの建築家、デザイナーによるそのような融合の有り様とその意義を検証することである。

3. 研究の方法

商業インテリアを研究対象とする本研究においては、作例である商業インテリアのほぼすべてが現存しないため、作例の実見はかなわない。したがって、本研究の方法は、作家の言葉や関連文献、現存する写真・図面資料を渉猟する実証研究である。これは、とくに美術史研究において一般的に行われている研究方法である。具体的な作業の順序としては、まず、対象デザイナー(美術家、建築家)の一次文献(作品集、著書、展覧会図録など)および関連文献(雑誌記事、美術・デザインに関する単行書)を渉猟し、作例の写真・図面、対象デザイナーの言葉

を整理、分析する。1960年代の商業インテリアに関する最重要の雑誌は『ジャパン・インテリア』『商店建築』である。その後、可能な場合には、対象デザイナー、またはその関係者に聞き取り調査を行う。分析の結果をまとめた論考を学会で発表し、意見を受けて修正したものを学術雑誌や電子ジャーナル等で公開する。同時に作品と文献データベースを作成する。

4. 研究成果

(1) 山口勝弘のインテリアに関する研究

調査の結果得られた第一の知見は、これまであまり知られていなかった山口によるインテリアの作例を分析できたことである。山口によるインテリアとして名高いのはクラブ《フォンテーヌ》（東京・銀座、1966、1968 改装）だが、今回新たにクラブ「ロマーナ」（東京・銀座、年代不詳）、ブティック「オートクチュール マダム ヤスダ」内のショールーム（東京・渋谷、1970）（引用文献 ）、そして商業インテリアではないが、1958年の東京・麻布の高層アパートの内装が見つかった。「ロマーナ」のインテリアは数年前に取り壊されており、文献もないため不明だが、ほかの2つは文献が存在する。

分析の結果、山口のインテリアに共通するのは、美術のオブジェもしくは色彩が空間を支配するデザインであることである。1968年に改装された《フォンテーヌ》のインテリアはスーパーグラフィックの手法により、色彩が空間を支配する。1958年の東京・麻布の高層アパートは、当時の山口が取り組んでいたヴィトリヌのオブジェが部屋を支配している。インテリアを支配する役割を担う美術は「インテリア・オブジェクト」と呼ばれるが、山口が美術家であることを考えれば、「インテリア・オブジェクト」から空間デザインを発想することはごく自然な流れであろう。ブティック「オートクチュール マダム ヤスダ」は山口が伊藤隆康と篠田守男とともに立ち上げたインテリア・オブジェの工房「OFF OFF」の作例であり、山口は本作について「空間から物へではなく 物から空間へという逆コースを大切にすること」をより良きインテリア・デザインの方法として挙げている（引用文献 ）。このことが本研究で得られた第二の知見である。

そして、第三の新知見は、この山口が実践したインテリア・デザインの方法が、1960年代の前衛的な建築家やインテリア・デザイナーたちに受け入れられ、彼らがこの考えを美術とインテリアの融合の方法として理解したと考えられることである。境沢孝はそのひとりであろう。建築家の東孝光が境沢のインテリアに関して次のように述べたことはこれを強く示唆する。「空間を創り出す方法には、勿論まわりの床、壁、天井から追いかける、つまり建築的手法がある。しかしそれ以外にも、例えば内部に置かれるオブジェによって、まわりの空気を支配していくという、有力なもう一つの手法が存在するではないかと、……、アートばやりの昨今のインテリアの世界……」（引用文献 ）」

(2) 伊藤隆道に関する研究

環境芸術家の伊藤隆道（1939～）は、1960年代後半から1970年代前半にかけて資生堂会館シヨウウィンドウディスプレイや、公共建築物やホテル、オフィスビルのロビー等のための空間オブジェや壁面オブジェで1960年代の空間デザインの寵児となった。1970年代初頭は「伊藤のインテリア・オブジェクトがついていない商業建築はない」と言われたほどである。「インスタレーション」の形式に近いが、伊藤が針金、銀紙、電球等でモビールを作ったのは、実のところ、与えられた低予算で作成でき、なおかつ人々の注意を惹きつけるというクライアントの要求を満たすためだった。すなわち、実際的な理由からデザインが発想されたのだが、きわめて興味深いのは、彼がこのモビールを通じて「美術の自己崩壊」「環境の創出」を行ったと

考えられることで、これが本研究から得られた第一の知見である。

「美術の自己崩壊」とはすなわち、伊藤が芸大2年のときに出合った Alexander Calder のモビール彫刻から、それを彫刻（純粋美術）として成立させている要素をはぎとることで、インテリア・オブジェクトあるいはディスプレイデザインへと変換させたことである（引用文献）。言い換えれば、重く高価な素材で一点ものとしてつくられるコルダのモビール彫刻に対し、伊藤のモビールは軽く、低価格の素材で、無数に増殖させられる。その意味で、彼のインテリア・オブジェクトは、美術（彫刻）をデザインに変換させたというよりは、美術の自己崩壊であったと解釈できるのである。

加えて、伊藤のインテリア・オブジェクトあるいはディスプレイデザインは動くものや光るものが多いが、これも発想のきっかけは「人の注意を引くため」という実際的な理由であった（引用文献）。しかし、彼が実際的な理由から編み出した光や動きをとまなういわば空間デザインは、のちに山口らを初めとするアーティストらにより、「環境芸術」という「美術」となる。すなわち、いったん崩壊した美術がここで復権する。

このような伊藤のインテリア・オブジェクトと美術との複雑な関係と、その関係性を生み出す彼の手法は、明らかに倉俣史朗のような現代美術に深い関心を抱くデザイナーを刺激している。これが、本研究が得た第2の知見である。倉俣は、1969年のクラブ《ジャッド》（東京・赤坂）において金属パイプを積み上げた壁面をつくるが、これはおそらく伊藤がパイプを積み上げた資生堂のディスプレイに刺激されて、ミニマル・アートの空間造形への変容を試みたものだろう（引用文献）。つまりここでは、ミニマル・アートを美術として成り立たせている要素がはぎとられているのである。この「はぎとり」の操作、あるいは美術の自己崩壊は、通常「ジャンルの解体」と呼ばれる。1960年代後半以降、特定の場所のための空間造形は、美術の世界ではインスタレーションやサイトスペシフィックの美術と化すが、インテリア・デザインでは「ジャンルの解体」の操作として生き残った。そこに美術のインテリア・デザインへの介入を見ることができ、その立役者となったのが他ならぬ伊藤のインテリア・オブジェクトなのである。

(3) 境沢孝のインテリアに関する研究

境沢孝(1919~2001)は、倉俣史朗とともに1960~1970年代に商業インテリアの教祖といわれた建築家である。現代美術に造詣が深く、その影響が明らかに感じられるきわめて実験的な商業インテリアを数多く手がけている点でも倉俣と共通する。しかしながら、倉俣に関する批評が生前からきわめて活発になされ、第三者による著述も多数あるのに対し、境沢に関してはほとんど研究されたことがない。したがって、境沢孝の研究は本研究のなかでもきわめて重要であった。研究者はまず、文献の掘り起しから始めるとともに、遺族への聞き取り調査を2018年に行った。境沢孝作品のデータは遺族の手で丁寧に保管整理されていることが分かった。

境沢孝の作例のうち、美術とインテリアの関連をもっともあらわにしているのは、1970年のカフェ《ともまつ》（東京・八王子）である。椅子もテーブルも照明スタンドもすべて布で梱包されたインテリアが想起させるのは美術家クリストの梱包芸術であり、境沢本人もそれを認めている（境沢、1986）。《ともまつ》は、倉俣の《エドワーズ本社ビル》（東京・南青山、1969）の美術家ダン・フレヴィンの蛍光管のインスタレーションへの近似とも比較し得るような、美術との近似性を有する。では、その近似にはどのような意義が見いだされるのか。それについて考えられる可能性の提示を研究者は試みた。

まず、境沢の言葉から考えられるのは、彼がクリストの梱包芸術に1960年代に広まったアンチデザインのひとつの方法を見出したと解釈できることである。アンチデザインとは、内田繁

の言葉を借りれば、1960年代当時のデザイナーたちが「多くの商業空間が陥りやすい表層的造形主義に対抗した」ことである（引用文献）。《ともまつ》は、クリストが物を梱包したのと同様、什器を梱包する。什器のかたちは原初的な幾何学形であり、かたちのデザインを境沢は拒否したように思える。境沢は、布の持つ「覆う、包むと言う物のアウトラインを残して暗示する重要な表現」と「本質的に形態が固定していない、言い換えれば、少しでも外力が加えられれば、たちまち変形してしまう」性格について言及している（引用文献）。すなわち《ともまつ》においては、布のそのような表現性が、かたちのデザインに取って代わるデザインを提示し得ると境沢は考えたのではないだろうか。ならば、これは、かたちをデザインしない、「アンチデザイン」の手法と捉えることができ、その手法を境沢はクリストの梱包芸術に見出した可能性がある。

もうひとつ推察されるのは、虚構の風景としての商業インテリアをつくる方法をクリストの梱包芸術に見出した可能性である。日本の商業インテリア・デザインは伝統的に虚構、または非日常の「風景」に重ね合わされてデザインされるケースが非常に多い。境沢は《ともまつ》について次のように記している。「無機の物質が自然に集った状態でも、ある生命力とか有機的な緊張感が現われてくる。単体はその意味を失うか変えるかまたはその意味の上に加えて、集合体としての新しい別の意味を持ち始めてくるからだろう。」「私がこの単色の箱の中の単色の衆落に望んだものは、個のリフレインやディベロップに過ぎない集合体ではなく、白いあげ羽蝶の群の羽ばたきや、砂漠に憩うラクダの集団の息使いがひそかに聞えてくることにあったのだが。」（引用文献）。境沢が希求したのは明らかに無機的なものが生けるものとして現前する虚構風景であり、それは布にくるまれた日用品が点在するクリストのインスタレーションから想起された可能性がある。

引用文献

伊藤隆道、完成され、しかし カレ はみえない、ジャパンインテリア、No. 125、1969年8月、35

山口勝弘、オートクチュール マダム ヤスダ ワークショップ オフ オフ、商店建築、Vol. 15、No. 12、1970年12月、81

境沢孝、コーヒーショップ ともまつ、ジャパンインテリア、No. 143、1971年2月、46

山口勝弘、現代造形とインテリア空間の変遷、インテリア 創刊15周年記念・12月増刊 現代日本のインテリア・デザイン1960-1975、インテリア出版株式会社、1975、24

東孝光、境沢孝 その転生の軌跡、インテリア 創刊15周年記念・12月増刊 現代日本のインテリア・デザイン1960-1975、インテリア出版株式会社、1975、90

伊藤隆道、宮脇檀、2 融け合う造形、キサデコールセミナーシリーズ3 宮脇檀対談集 つくる術について五人のデザイナーたちと語った、新建築社、1976、69-108

境沢孝、表現としての布、ジャパンインテリア、No. 228、1978年3月、35

インタビュー 内部からの風景3 境沢孝、SD (Space Design)、No. 260、1986年5月、40
内田繁、近代インテリアデザインの潮流 明治・大正・昭和、内田繁、沖健次編・著、日本のインテリア Vol. 1 デザインの奔流、六耀社、1994、22

伊藤隆道作品集、株式会社モブ、2006

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Keiko Hashimoto, ANALYSIS OF “APPROPRIATION” PRACTICED IN JAPANESE

COMMERCIAL INTERIOR DESIGN BY SHIRO KURAMATA AND TAKASHI SAKAIZAWA、AMPS Proceedings Series 15. Tangible-Intangible Heritage(s) -Design, social and cultural critiques on the past, the present and the future、2019、235-242 査読有

<http://architecturemps.com/proceedings/>

Keiko Hashimoto、Shiro Kuramata's Interior Design、The International Journal of Arts Theory and History、Vol. 12、Issue 4、2017、21-26 査読有

<https://doi.org/10.18848/2326-9952/CGP/v12i04/21-2>

〔学会発表〕(計4件)

Keiko Hashimoto、Analysis of 'Appropriation' Practised in Japanese Commercial Interior Design by Shiro Kuramata and Takashi Sakaizawa、TANGIBLE – INTANGIBLE HERITAGE(S) – DESIGN, SOCIAL AND CULTURAL CRITIQUES ON THE PAST, PRESENT AND THE FUTURE、国際学会、査読有、2018年6月14日、University of East London

橋本啓子、伊藤隆道のインテリア・オブジェクトにみる1960年代のジャンル解体運動の意義、第68回美学会全国大会、国内学会、査読有、2017年10月7日、國學院大學

Keiko Hashimoto、Katsuhiro Yamaguchi's Influence on the Commercial Interior Design of the 1960s、第58回意匠学会大会、国内学会、査読有、2016年7月31日、京都精華大学

Keiko Hashimoto、Shiro Kuramata's Interior Design: Abstraction as Reconstruction of the Childhood Memories、The 10th Conference of Arts in the Society、国際学会、査読有、2015年07月22日、Imperial College, London

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。